（平成２９年１０月１９日）

第２５回　赤松小三郎研究会　のご報告

日時　　：Ｈ２９．１０．１７（火）　１８：３０～２０：３０
場所　　：東京・文京シビックセンター　４Ｆ　Ｂ会議室
出席者　：１９名

＜　**配布資料**　＞

資料―１　「京阪御用状往復留」（寺島隆史氏講演資料）から分かったこと
　　滝澤進さん作成
資料―２　第２４回赤松小三郎研究会報告書～荻原貴さん作成
資料―３　故宮原安春様からの図書のご寄贈について～事務局作成
資料―４　舎人倶楽部２０号、地域研究レポート「赤松小三郎と憲法構想」～滝澤進さん寄稿
資料―５　忠固公を語る講演会＆トークセッション（明倫会）～関良基さん基調講演
資料―６　上田博物館企画展「赤松小三郎」～幕末の先覚者～チラシ

＜　**回覧資料**　＞

・　白井亜希さんより雑誌「千曲」５６号が回覧された。尾崎行也氏の論考「慶応三年九月赤松小三郎横死」が掲載されている。今回のテーマに関連して一読に値する論文。

＜　**内　容**　＞

１．　ＮＨＫ番組**「英雄たちの選択」**の製作会社ディレクター　池ヶ谷実希さんが特別参加。来年１月放映予定の薩摩藩についての番組で赤松小三郎について触れるとのこと。

２．　**憲政記念館の企画展の報告**～石川浩さん

・憲政記念館で上田市立博物館企画展「赤松小三郎　―幕末の先覚者―　」のポスターを展示し、チラシを置いていただくことになった。

・憲政記念館では現在、2 階展示室で 特別企画展示「幕末明治からのメッセージ―激動の時代を彩った人々―」シリーズⅠが行われているが、来年の９月頃にシリーズⅣが総集編として企画されている。そこに、赤松小三郎について展示したいと、ご担当の岩間一樹課長代理が述べている。具体的になったら連絡しますとのこと。これまでの打ち合わせが、一歩前進したように思います。

３.「京阪御用状往復留」（寺島隆史氏講演資料）から分かったこと～滝澤進さん

寺島隆史氏の講演（１０月８日）内容をベースにその内容について精査し、疑問点を寺島隆史氏に改めて訊ねるなどして丁寧にまとめられた報告である。

・小三郎の上京は一般に言われるような慶応２年２月ではなく、同年秋の７月～９月頃である（寺島氏コメント）

・小三郎は、脱藩状態で上京したのではなく、少なくとも上京時には、藩に願を出し、許されて上京している。

・小三郎は慶応２年８月までは藩のいうことを聞いていたが、その後は赤座とは連絡がとれていたとは言え、脱藩に近い状態で京に居座った。（寺島氏コメント）

・慶応２年１１月、在京中の首席家老板倉勝静より小三郎を開成所教官兼海陸軍兵書取調役に採用したい旨、申し入れがあった。上田藩は兵制一新などに必要な人物だとして、同年１２月に断る。

・慶応２年８月、小三郎は幕府に対し口上書を提出した。（征長の無謀を指摘、兵制改革など）また、同年９月、上田藩主に対しても、藩政改革の意見書を提出している。

・上田藩はこのような政治的動きをする小三郎を開成所に出すと何をするかわからないとして出役を断ったのではないか（寺島氏コメント）

・会津藩でも同時期に小三郎に依頼し、会津藩本陣（金戒光明寺）で銃隊調練の稽古をつけてもらっており、次第に熟練してきたときであった。

・会津藩が小三郎の滞京を望んだのは、小三郎から稽古を受けている会津藩銃隊が望んでいること及び動きが漏れてこない薩摩藩の情況を小三郎がうかがえる立場にあることが理由だとされている。

・会津藩からは、小三郎の開成所出役を断ったことについては、会津藩から老中板倉勝静家来にうまく話しをするので心配ないとの申し出があった。

・薩摩藩は小三郎に英国式軍事の講義と実技指導を京都藩邸（実際には隣の相国寺）で依頼しており、小三郎にはその間の宿舎と御手当を提供して、「御借入中」という扱いであった。しかし、上田藩では、小三郎のこのような動きについては、全くといって良いほど知らなかった。

・上田藩京都留守居役（代）の赤座寿兵衛は、小三郎が薩摩藩と接触していることを「究竟（くっきょう）の儀」（おあつらえ向き）ととらえ、会津藩公用人よりの話しであるので、当人の心得の真偽はさておき、会津藩の意向に沿ってしばらくの間はそのまま滞京させてよいのではないか、と国元の重役連に伺いを立てていた。

・会津藩が、小三郎暗殺の引き金になった小三郎の帰郷をなぜ勧めるようになったのか。この資料では、会津藩としては、上田藩に小三郎を滞京させてくれるよう表向きの掛け合いができないので、一先ず帰郷させてくれと言ってきたとされているが、会津藩の真意がどこにあったのかについては、さらなる研究が必要である。

・小三郎暗殺は、在京の薩摩藩上層部も了承のうえでの犯行に違いないと思われる。「忠義公資料」には「中将公（久光）、御出立前夜、（赤松を）討果候ヨシ」の記述がある。往復留の記述と合わせて素直に読めば、久光が小三郎暗殺を了解した上で、最終的には命令して、小三郎を討ち果たしたということではないか。（寺島氏コメント）

・小三郎の出役を断った上田藩が、正式に小三郎を薩摩藩に貸すなどということはあり得ないが、薩摩藩が「借入中」だったと強調しているのは、仮に薩摩藩が小三郎を殺したとの噂が広がったとしても、「借入中」であり、家来に準ずるものを、スパイ行為をしたので、「上意討ち」したまでだと、言い訳、開き直りできるように、あらかじめ強調、宣伝しておこうとしたものであったのではないか。（寺島氏追加コメント）

・「重訂　英国歩兵練法」刊行のための翻訳を頼み、また、師として招き教授を受けた恩師でも、疑念のある者、薩長同盟の障害になりかねない者を、それも最終的には実質的なトップである久光の命で殺すことで、武力行使によるクーデターへ向けての薩摩の覚悟の程を長州にしめそうとした、示すように品川・長州側から求められた、という側面もあるのではないか。赤松小三郎はその犠牲になった、とも言えるのではないか。（寺島氏追加コメント）

４．討論・意見表明

・小三郎暗殺に久光が関与していたかどうかについて、賛否両論が述べられた。

・「蛮社」の人達・・沓掛忠さんの意見表明
同志社大学　岡林伸夫教授の論文「延遣米使節におけるアメリカ体験の諸相（三）より」　に基づいて。

「蛮社」の一員である江川太郎左衛門英龍が江戸湾防衛問題について渡辺崋山の助言を求めたため、幕府保守派の反発をかい、弾圧されることになった。しかし、蛮社に加わっていた江川太郎左衛門や下曽根金三郎などの幕臣は不問に付された。天保１１年（１８４０年)、幕府が高島流洋式砲術を採用したため、諸藩も競ってその導入をはかり、洋学は「軍事科学化」していく。洋学（蘭学）は従来の医学を主としたものから「富国強兵」のための知識・技術を中心としたものに転換していく。軍事科学としての幕末の洋学を担った中心は以前の医師に代わって武士であり、それも下級武士が多かった。佐久間象山は早くも１８４２年に江川太郎左衛門に入門し、洋式砲術を学んだ。諸藩はこぞって優れた洋学者を藩校などに招聘した。幕府も「蕃書調所」の教授職・教授手伝を諸藩から登用したのをはじめ、外国奉行御書翰掛配下の翻訳方・通弁方にも諸藩のすぐれた人材（箕作秋坪、福沢諭吉、福地源一郎ら）を採用した。赤松小三郎の招聘依頼もこれらの一環であったと考えられる。しかし、上田藩の拒否により実現しなかった。このような形で「御雇」となった非幕臣洋学者の一部は元治元年（１８６４年）以降、続々と正規に「幕臣」化されていく。例えば、「蕃書調所」の教授手伝となった手塚律蔵（佐倉藩)、村田蔵六（宇和島藩）はいずれも周防の出身でありながら各藩に招聘され、さらに幕府に任用された。それらは「新しいタイプの人材登用の出現」であった。

赤松小三郎研究会 事務局
小山平六（６２期）